埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集

割山西遺跡

1987．3

埼玉県深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集

割山西遺跡

（わりやまにし）

1987．3

埼玉県深谷市教育委員会

序

大地の中に埋もれている埋蔵文化財は、発掘調査などを行わないかぎり、私たちの目に触れることはほとんどありません。したがって、発掘調査を行いますと、知らざる歴史の一断面に遭遇することがしばしばあります。

このたび、東京電力株式会社深谷営業所の移転建設に伴い、同社の委託により、市内上野台地区にある割山西遺跡の発掘調査を実施いたしました。割山西遺跡の周辺は、隣接する割山遺跡や鼠裏遺跡の発掘調査を既に数回にわたり実施しており、中世の館跡である可能性が指摘されております。このたびの発掘調査により、その可能性はますます高まりました。この付近に館があったという伝承等は全く残されておりません。正に、人々の記憶から消え去った歴史の一部分の発見に繋がるものと思われます。

歴史の未知の側面を発見しますと、人間はつい想像の翼を留処なく広げがちになりますが、文化財保護活動などを通しての、地道な調査・研究を積み重ねてこそ、私たちの歴史を正しく理解することができましょう。この報告書にまとめられた割山西遺跡発掘調査の成果も、必ずや郷土史の1ページをしっかりと支えうるものと確信しております。

おわりに、発掘調査にあたり、御協力をいただいた東京電力株式会社のみなさまや地元のみなさまに、厚くお礼申し上げます。

昭和62年2月

深谷市教育委員会

教育長　鳥塚　恵和男

例　　言

1．本書は、東京電力株式会社深谷営業所建設に伴う、埼玉県深谷市大字上野台字割山2922、2923番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。事業名は、割山西遺跡発掘調査とした。

2．発掘調査は、経費を原因者である東京電力株式会社が負担し、深谷市教育委員会が委託を受けて実施した。現地発掘期間は昭和61年４月23日～５月17日で、調査面積は約600㎡である。

3．本書の執筆、編集及び写真撮影は澤出晃越が行った。

4．出土品の整理及び図版の作成等は、整理参加者全員で行った。

5．挿図中の方位は、座標北を示している。遺構に関する数値は、特に断わらない限り、確認面におけるものである。

6．出土品は、深谷市教育委員会が保管している。

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	鳥塚恵和男
		教育次長	堀輝雄
事　務　局	深谷市教育委員会社会教育課	課長	飯島光武
		課長補佐	河田記久平
		文化財保護係長	工藤友明
		主事	小林京子
調査担当者	深谷市教育委員会社会教育課	主事	澤出晃越

調査参加者　井上純子、宇賀地桂子、大原黎子、加藤佳子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、里山まり子、都築百合子、細川ケイ子、水野祥代、本橋玲子、森光代、湯沢直子、渡辺哲子

目　　次

序
例　　言
目　　次

Ⅰ．発掘調査に至る経過……1

Ⅱ．遺跡の地理的歴史的環境……3

Ⅲ．発掘調査の概要……6

Ⅳ．遺構と出土遺物……9
　1．遺　　構……9
　2．出土遺物……15

Ⅴ．まとめ……18

付　　記
写真図版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１／20,000）
第２図　調査区周辺地形図（１／10,000）
第３図　調査区全測図（１／160）
第４図　埋没谷トレンチ土層断面図
第５図　第１～８・12号土坑実測図
第６図　第13～18・20号土坑実測図
第７図　第９～11号土坑・第１号溝状遺構実測図
第８図　第１号溝状遺構遺物出土状態実測図
　　第２号溝状遺構実測図
第９図　出土遺物実測図
第10図　溝状遺構位置関係図（1）
第11図　溝状遺構位置関係図（2）

Ⅰ．発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人、渋沢栄一の生誕地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは、山内上杉家の一族、上杉房憲が康正２年（1456）に築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約90,000人、面積約70km^{2}で、農業生産高は県内随一を誇り、近年は工業団地の形成、住宅の増加など、急速に都市化が進行している。

国鉄高崎線深谷駅に至近な台地上である上野台地区は、市内でも特に住宅が急増している地域である。昭和61年２月、東京電力株式会社埼玉支店より市教育委員会へ、東京電力深谷営業所が大字上野台字割山2922、2923番地に移転する予定であり、移転予定地の埋蔵文化財の所在について照会があった。市教育委員会は、当該地が、昭和56年度に発掘調査を実施した都市計画街路南通り線に隣接していることから、埋蔵文化財が所在することが予想され、予め状況を確認するために、試堀調査を行わなければならない旨を回答した。

昭和61年３月６日付け埼発管第342号にて、東京電力株式会社埼玉支店より市教育委員会へ、試堀調査が依頼された。市教育委員会は、３月10日、東京電力株式会社担当職員の立会いのもとに試堀調査を実施し、溝状遺構や土坑が存在することを確認した。

正式な試堀調査の報告は、３月29日付け深教社発第205号にてなされたが、試堀調査直後から、東京電力株式会社埼玉支店管財課と市教育委員会社会教育課、両担当課は協議を重ね、記録保存のための発掘調査を実施しなければならないことを確認した。

発掘調査は、深谷市教育委員会の直営、経費は原因者である東京電力の負担とし、４月11日に発掘調査を委託契約を取り交わした。なお、事業名は割山西遺跡発掘調査とし、文化庁からは、昭和61年８月１日付け61委保記第２－2426号にて、発掘調査通知の受理通知があった。

1．桜田馬場　2．深谷城跡　3．庁鼻和城跡　4．鼠裏遺跡　**5．割山西遺跡**
6．割山遺跡　7．桜ケ丘組石遺跡　8．秋元氏館跡　9．小台遺跡　10．人見館跡

第１図　遺跡位置図（1／20,000）

Ⅱ．遺跡の地理的歴史的環境

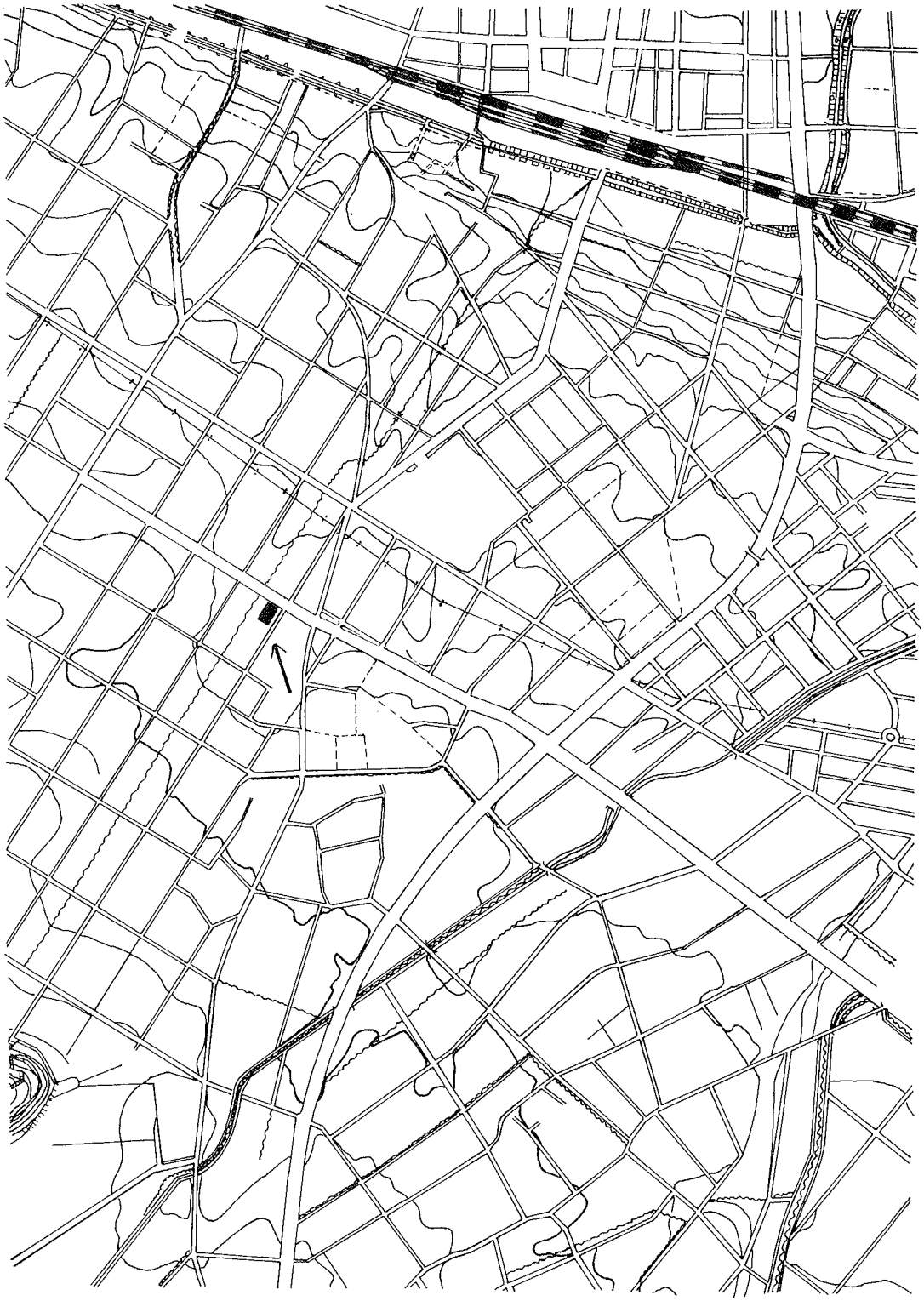
割山西遺跡は、埼玉県深谷市大字上野台字割山2922番地ほか、国鉄高崎線深谷駅の南南西約0.8kmにある。櫛挽台地櫛挽面（櫛挽段丘）の北端部に近く、標高は約57ｍである。東には、埴輪窯跡などがある割山遺跡（昭和37・53・55・59・60年度調査、註１）があり、西には、中世～近世の遺跡である鼠裏遺跡（昭和56年度調査、註２）がある。

深谷市の地形を概観すると、市の中央部をほぼ東西に通る国鉄高崎線付近を境に、南半を占める櫛挽台地と北半を占める妻沼低地に二分される。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる扇状地性の洪積台地である。妻沼低地は、利根川作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、晩冬から早春にかけてはひどい土埃に悩まされることもしばしばである。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年は花・植木などの栽培も盛んになっている。台地北端部は、駅に近いこともあり、住宅などが急増している。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ケ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面は、ほぼ国鉄高崎線沿いの崖線で、比高５～10ｍをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は、高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高２～５ｍをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面が40～50ｍ、寄居面が32～36ｍ、妻沼低地が30～31ｍである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などの松久丘陵を挟んで、立川面に比定される本庄台地が広がっている。寄居面の南側には、荒川を挟んで、下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘、標高98.0ｍの仙元山があり、熊谷市内の寄居面北東にも同様の残丘、標高77.4ｍの観音山がある。なお、台地北端の櫛挽面と寄居面の境界付近に、活断層（深谷断層）が確認されている。

妻沼低地は、利根川流域に広がる低地である。南は熊谷市付近を境として、秩父山塊に連なる台地や丘陵と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に連なる。妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部があり、周辺では住宅が急増している。妻沼低地内は、現在はかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達していたものと思われる。血洗島、矢島、大塚島、内ケ島などのように、島地名が多いこともこのことを裏付けている。現在、寄居面北端部との接線付近から西北へ、島地名の土地を包括して遺跡が連続していることが確認されている。このことは、自然堤防の状況をよく表わしているものといえよう。なお、この自然堤防を縦断するように、国道17号深谷バイパスの建設が予定されており、現在、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、予定地の発掘調査が実施されている。多大な考古学的成果を挙げつつあるとともに、自然堤防の状況を詳細に知るための基礎資料になるものと思われ、成果の公表が大いに期待されるところである。

さて、10世紀頃になると、歴史の舞台にいわゆる武士団が登場してくる。武蔵国では、同族的武士団といわれる武蔵七党が著名であるが、大里、児玉地域には、猪俣党、児玉党、丹党、横山党な



第２図　調査区周辺地形図（1／10,000）

どの諸氏などが密集していたとされる。現在の深谷市域だけをみても、人見氏、内ケ島氏、横瀬氏、荏原氏、蓮沼氏らの猪俣党の諸氏や、渡来系秦氏の子孫といわれる新開氏などの館跡伝承地がある。このうち、内ケ島氏、横瀬氏、荏原氏、蓮沼氏、新開氏の館跡伝承地は妻沼低地側にあり、肥沃な低地の豊かな生産力を基盤としていたことが知られる。

人見氏の館跡伝承地は、割山西遺跡の南南西約1.5km、櫛挽台地面の押切川に開析された谷沿いに立地し、今も土塁や空掘の一部が残っている（注３）。人見氏は、10世紀末頃に那珂郡猪股（現在の児玉郡美里村猪俣）に土着したといわれる猪俣時資の五代孫、政経が当地に居住し、人見六郎を称したのに始まるとされる。その子孫の活躍の様子は、「吾妻鏡」、「太平記」などに散見されるが、鎌倉幕府の滅亡の後は、丹波国高瀬郷に移住したらしい。一族の中には、現在の東京都府中市へ移住した者もあったらしい。館跡の南約0.4kmにある一乗寺は、人見氏の菩提寺とされ、人見氏累代の墓といわれる３基の五輪塔と２基の板石塔婆があるが、いずれも銘文等は摩滅のため不明である。一乗寺には他に６基の板石塔婆があるが、年号がわかるものは５基ある。その年号は、文保２年（1318）、正中２年（1325）、元弘３年（1333、南朝年号、北朝年号では正慶２年）、建武３年（1336）、永和４年（1378）である。

人見氏の消息が当地から跡絶えるのと相前後して、14世紀の後半頃に、深谷上杉氏の祖、上杉憲英が現在の国済寺（割山西遺跡の東北東約2.5km）に庁鼻和城跡を構築したとされている。憲英は、関東管領山内上杉憲顕の子である。現在、庁鼻和城跡の中心にある国済寺は、康応２年（1390）に憲英により創建されたと伝えられ、庁鼻和城が築かれたのは、それ以前であったものと推定される。憲英が庁鼻和城を築いた理由は明らかではないが、父憲顕が、貞治元年（1362）に上野国・越後国守護に復職していることから、上野国を本拠地として足利氏に抵抗していた南朝方の新田氏の動きを抑えることと、越後国への通路を確保することが主な目的であったと考えられよう。

割山西遺跡の東にある割山遺跡では、昭和53・55・59年度の発掘調査により、館を囲む堀跡と思われる溝状遺構が調査された（註４）。この遺構は、13世紀末～14世紀初頭頃に構築されたものと推定されている。今回の調査区の北辺は、昭和56年度に鼠裏遺跡Ｃ区に接している（註５）。鼠裏遺跡Ｃ区では、割山遺跡のものと関連があると思われる溝状遺構や、墓坑などの土坑が調査されており、土坑から乾元２年（1303）銘を有する板石塔婆や古銭などが出土している。

註１　小沢国平　「割山埴輪窯跡」　昭和39年３月　深谷市教育委員会
　　小泉泰之・大和修ほか　「割山遺跡」　昭和56年３月　深谷市割山遺跡調査会
　　小泉泰之ほか　「割山遺跡（第３次）」　昭和57年２月　深谷市教育委員会
　　澤出晃越　「割山遺跡（第４次）」　昭和60年３月　深谷市教育委員会
　　〃　「割山遺跡（第５次）」　昭和61年３月　深谷市教育委員会
註２　〃　「鼠裏遺跡」　昭和58年３月　深谷市教育委員会
註３　15世紀の中頃に、深谷上杉氏の一族、上杉憲武が改修を加えて館を構えたといわれ、現在残っている遺構はその時のものである可能性が高い。埼玉県指定史跡。
註４・註５　註１・註２参照。

Ⅲ．調査の概要

昭和61年４月24日、パワーショベルによる表土の削除により、発掘調査を開始した。

４月25日、表土削除を続行するとともに、器材を運搬し、運搬終了後、直ちに精査を開始した。土坑10数基、溝状遺構２条を確認した。調査区の西南半は、泥炭質の黒色土や灰色粘質土が推積しており、埋没谷であろうと推定された。

４月26日、土坑数基を堀り始めるとともに、埋没谷に、とりあえず第３トレンチを設定して堀り始めた。

４月30日、座標北に揃えて４ｍ間隔のグリッド杭を設定した。グリッドは、西から東へアルファベットを、北から南へアラビア数字を付して呼称した。第２号溝状遺構を、２本のベルトを設定して堀り始めた。精査の際に、第２号溝状遺構は、第１号溝状遺構と埋没谷を切って構築されていることが確認されていた。

５月１日、第１号溝状遺構を、ベルトを２本設定して３つの区画に分け、北からａ区、ｂ区、ｃ区とし、ｂ区から堀り始めた。なお、第１号溝状遺構は、Ｅ―７グリッドで終わっており、南端部は土坑と切り合っているものと思われた。

５月２日、第１号溝状遺構ｃ区を堀り始め、南端部付近より板石塔婆片が出土した。

５月７日、埋没谷に、第４トレンチを設定して堀り始めた。

５月10日、第１号溝状遺構の南端部は、土坑と切り合っているのではなく、ほぼ直角に西へ屈曲し、約3.5ｍほど延びて止まっていることを確認した。

５月12日、土坑の調査をほぼ終了した。埋没谷に第１、第２トレンチを設定し、堀り始めた。

５月13日、市立桜ケ丘小学校の６年生が、発掘調査を見学に来た。

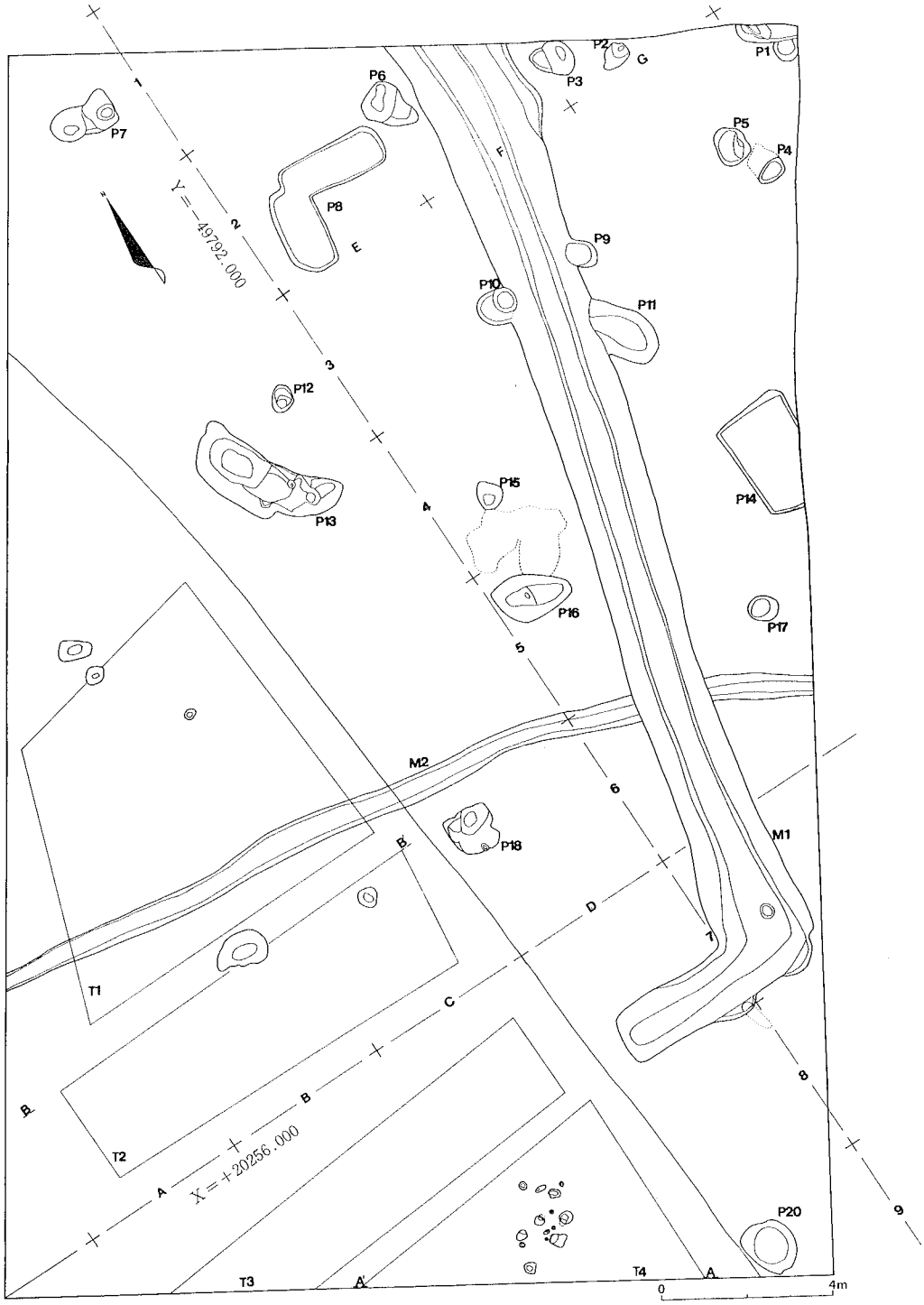
５月14日、第１号溝状遺構の調査をほぼ終了した。

５月16日、平板測量により、調査区の全測図をとった。

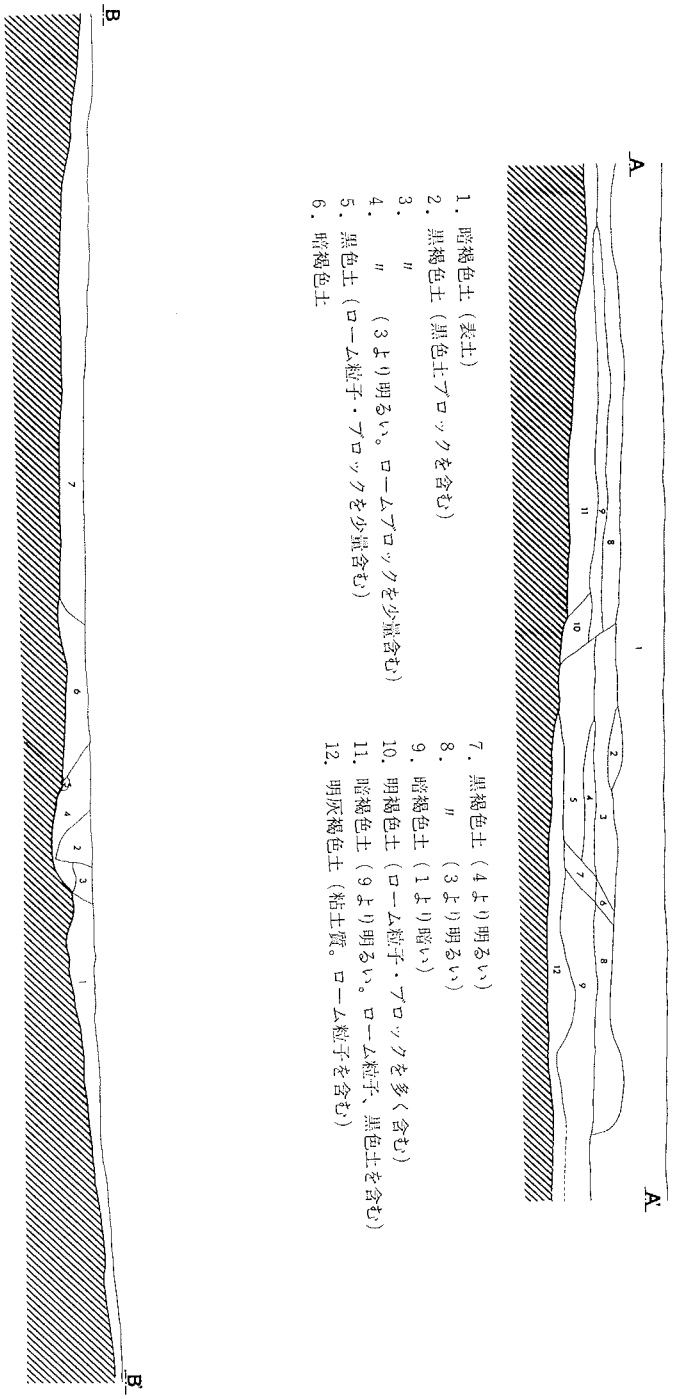
５月17日、全景写真を撮影し、器材を撤収して現地の調査を終了した。

なお、調査中の後半はしばしば雨に悩まされ、第１号溝状遺構には水がよく溜り、排水に苦慮した。

検出された遺構は、土坑19基、溝状遺構２条で、いずれも中世～近世の遺構と考えられる。土坑は、切り合い関係を含むものもあるので、実際の数はもう少し多いが、墓坑と推定される長方形を呈するものが３基ある。第１号溝状遺構は幅約２ｍで、昭和56年度の鼠裏遺跡Ｃ区で検出された溝状遺構の続きである。第２号溝状遺構は、幅約60cmほどの細いもので、近世の排水路と考えられる。出土遺物は極めて少ないが、第１号溝状遺構からは、内耳付と推定される瓦質土鍋の破片、板石塔婆片などが出土し、埋没谷の第３トレンチからは、土師器片、埴輪片などが出土した。また、グリッド出土遺物として、縄文土器片、土師質土器片などがある。



第３図　調査区全測図（1／160）



第4図　埋没谷トレンチ土層断面図（1／60）

Ⅳ．遺構と出土遺物

１．遺構

○第１号土坑（第５図）

調査区西北隅に位置する。土坑２基以上の切り合いと考えられる。平面規模は不明だが、深さは最も深い部分で約60cm（現地表面より約120cm）である。底面は凹凸がある。

○第２号土坑（第　図）

２―Ｇグリッドに位置する。平面プラン0.7×0.55ｍ、深さ約15cmの小土坑である。

○第３号土坑（第５図）

２―Ｇグリッドに位置する。平面プラン1.1×0.8ｍ、深さは最も深い部分で約25cmである。西側はテラス状になっており、小土坑２基の切り合いの可能性がある。

○第４号土坑（第５図）

２・３―Ｇグリッドに位置する。平面プランは0.7×0.45ｍほどの卵形を呈し、深さ約10cmの浅い土坑である。北側にごく浅い攪乱を受けている。

○第５号土坑（第５図）

２―Ｇグリッドに位置する。平面プランは0.9×0.8ｍほどの長円形を呈し、深さは20～25cmである。底面は、東側の一部が皿状に深くなっている。

○第６号土坑（第５図）

２―Ｆグリッドに位置する。平面プランは1.3×1.0ｍほどで、深さは最も深い部分で約25cmである。南半はテラス状になっており、底面は皿状を呈する。

○第７号土坑（第５図）

１―Ｄグリッドに位置する。径0.8ｍほどの土坑２基の切り合いである。いずれも擂鉢状を呈し深さは東側の土坑が約35cm、西側の土坑が約30cmである。

○第８号土坑（第５図）

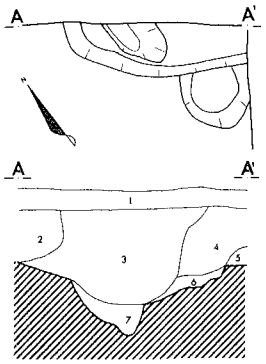
２―Ｅグリッドに位置する。長方形を呈する土坑２基の切り合いである。北側の東西方向の土坑が、南側の南北方向の土坑を切っている。東西方向の土坑は、平面プランは2.5×1.0ｍ、深さは約15cmで、主軸方向はＮ―81°―Ｗである。南北方向の土坑は、平面プランは2.15×1.1ｍ、深さは約15cmで、主軸方向はＮ―９°―Ｅである。すなわち、この土坑２基は、ほぼ直角の位置関係にある。

○第９号土坑（第７図）

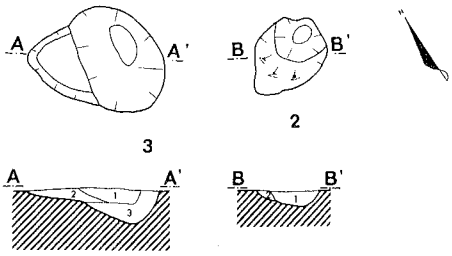
３―Ｆグリッドに位置し、第１号溝状遺構に切られている。平面プランは長円形状を呈するものと思われ、深さは約15cmである。

○第10号土坑（第７図）

３―Ｅ・Ｆグリッドに位置し、第１号溝状遺構を切っている。平面プランは径約1.0ｍの円形状を呈し、西側がテラス状になっている。深さは、最も深い部分で約30cm、テラス状の部分は約15cm

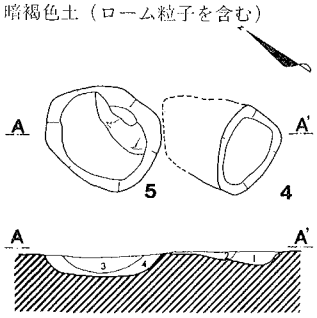


1．暗褐色土（表土）
2．黒褐色土（ローム粒子を含む）
3．暗褐色土
4．　〃　（3より明るい。ロームブロックを少量含む）
5．明褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
6．　〃　（5より明るい。ローム粒子・ブロック含む）
7．暗褐色土（ローム粒子を含む）

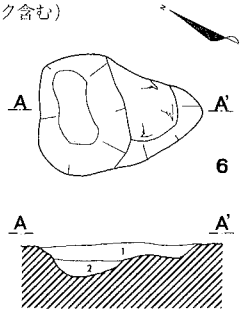


1．黄褐色土（ローム粒子を多量に、黒色土を含む）
2．　〃　（ローム粒子を多量に含む）
3．黒色土

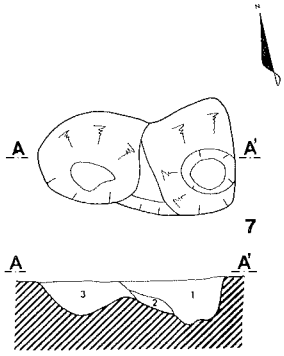
1．黒褐色土（ローム粒子を含む）
2．黄褐色土



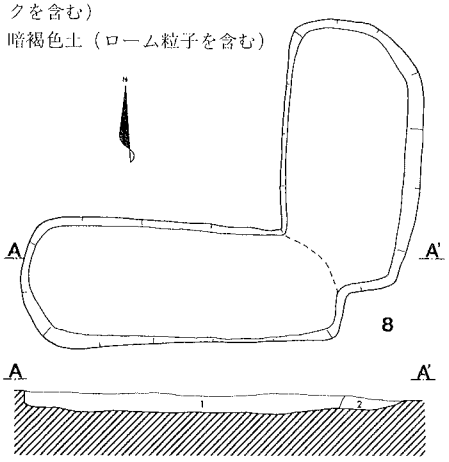
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．攪乱
3．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
4．暗褐色土（ローム粒子を含む）



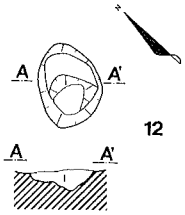
1．暗褐色土（ローム粒子を含む）
2．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）



1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
2．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
3．暗褐色土（1より暗い。ローム粒子・ブロックを少量含む）



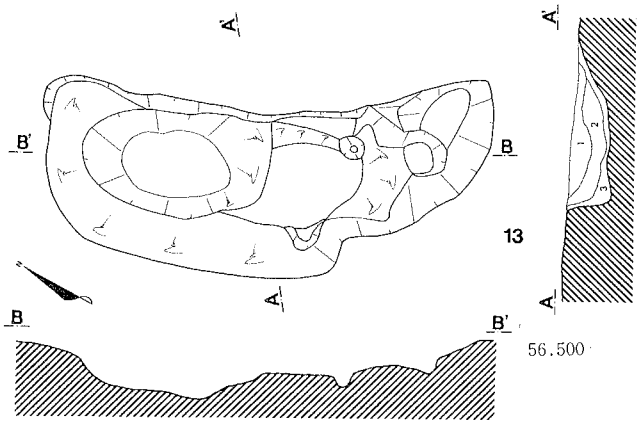
1．黒色土（ローム粒子・暗褐色を含む）
2．黒褐色土（ローム粒子を含む）



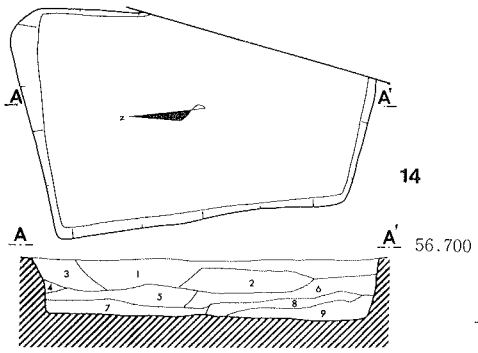
1．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）

0　2m

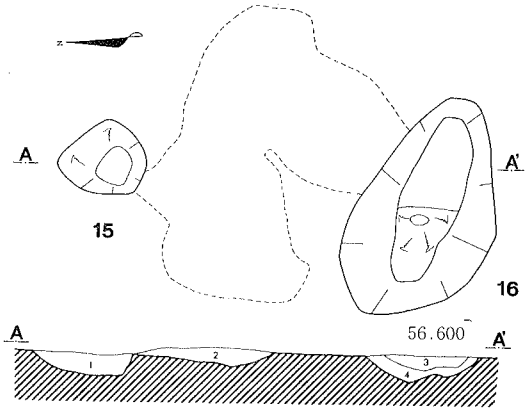
第5図　第1～8・12号土坑実測図（1／60）



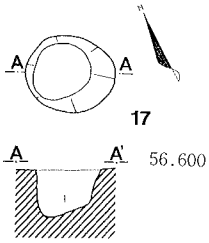
1．黒褐色土
2．　〃　（ローム粒子を含む）
3．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）



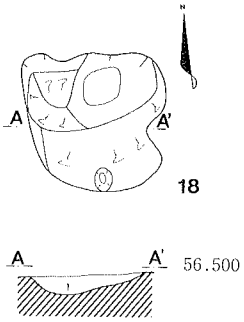
1．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）
2．黄色土（ローム粒子を多量に含む）
3．暗褐色土（ローム粒子を含む）
4．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）
5．暗褐色土（3より暗い。ローム粒子を少量含む）
6．黒褐色土（ローム粒子を含む）
7．　〃　（6より暗い。ローム粒子を少量含む）
8．明褐色土（ローム粒子を少量含む）
9．　〃　（8より明るい）



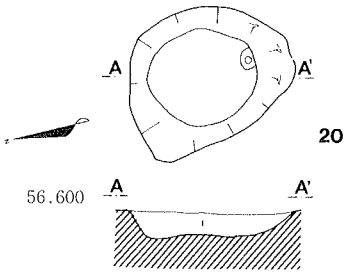
1．黒色土（ローム粒子を含む）
2．攪乱
3．黒褐色土（ローム粒子を含む）
4．　〃　（3より明るい。ローム粒子を含む）



1．明褐色
（ローム粒子を含む）



1．黒色土
（ローム粒子・ブロックを含む）



1．黒褐色土

0　2m

第6図　第13～18・20号土坑実測図（1／60）

である。

○第11号土坑（第７図）

４―Ｆグリッドに位置し、第１号溝状遺構に切られている。幅約1.2ｍで、底面は東側へなだらかに深くなっており、深さは約45cmである。

○第12号土坑（第５図）

３―Ｄグリッドに位置する。平面プランは0.7×0.5ｍほどの長円形を呈し、深さは約30cmである。北側はテラス状になっている。

○第13号土坑（第６図）

３・４―Ｄグリッドに位置する。平面プランは3.5×1.3ｍほどで、深さは最も深い部分で約45cmである。北側が深くなっており、底面は凹凸が激しい。

○第14号土坑（第６図）

５―Ｆグリッドに位置する。平面プランは2.7×1.8ｍほどの長方形を呈する。深さは約50cmで、底面は平坦である。

○第15号土坑（第６図）

４―Ｅグリッド位置する。平面プランは径約0.6ｍの不整円形を呈し、深さは約20cmである。全体は擂鉢状を呈する。

○第16号土坑（第６図）

５―Ｅグリッドに位置する。平面プランは1.9×1.1ｍほどの長円形状を呈し、深さは約25cmである。底面はやや凹凸がある。

○第17号土坑（第６図）

５―Ｆグリッドに位置する。平面プランは0.7×0.6ｍほどの長円形状を呈し、深さは約35cmである。底面はやや斜めになっている。

○第18号土坑（第６図）

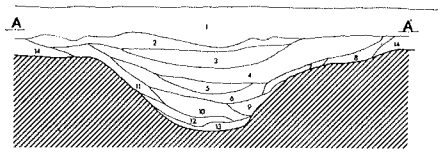
６―Ｄグリッドに位置する。平面プランは1.1×1.1ｍほどの不整形を呈し、深さは最も深い部分で約15cmである。底面は凹凸が激しく、南端に径15cmほどのピットがある。

○20号土坑（第６図）

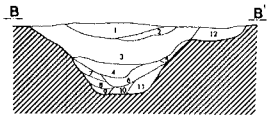
９―Ｄグリッドに位置する。平面プランは1.3×1.1ｍほどの長円形状を呈し、深さは約25cmである。底面の南端に径約15cmのピット状の部分がある。瓦質土鍋の破片が出土した。

○第１号溝状遺構（第７図）

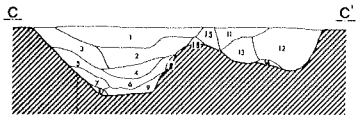
調査区の東側を、ほぼ南北方向（Ｎ―16°―Ｗ）に走っている。上幅1.7～2.2ｍ、下幅0.4～0.6ｍ、深さ70～80cmで、南端はほぼ直角に西へ屈曲し、3.5ｍほど延びて止まっている。屈曲した先端部は、幅約1.4ｍ、深さ約50cmである。壁はほとんど風化は認められず、下位に弱い稜を有して40°～50°をもって立ち上がり、いわゆる箱薬研堀状を呈する。屈曲部の底面に、径約30cm、深さ約30cmの小ピットがあり、屈曲した先端部の南壁の中ほどに、径約30cm、奥行約80cmの小ピットが、斜めに穿たれていた。また、先端部付近の壁面には、数多くの小孔がみられた。屈曲部付近から、



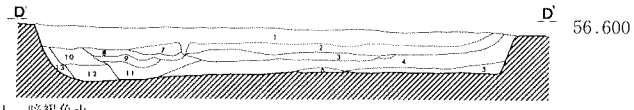
1．暗褐色土（表土）
2．　〃　（1より暗い。火山灰質の砂を含む）
3．　〃　（2より暗い。）
4．黒褐色土
5．　〃　（4より明るい）
6．暗褐色土（ローム粒子を少量含む）
7．　〃　（6より明るい。ローム粒子・ブロックを少量含む）
8．明褐色土（ローム粒子含む）
9．暗褐色土（6より明るい。ローム粒子を多く含む）
10．黒褐色土（ローム粒子を含む）
11．明褐色土（ローム粒子を含む）
12．黒褐色土（10より暗い）
13．灰褐色土（ローム粒子を含む）
14．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）



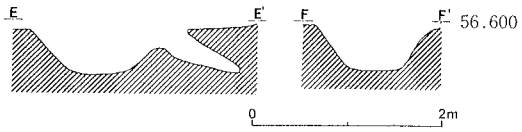
1．黒褐色土（ローム粒子・砂を少量含む）
2．暗褐色土（ローム粒子・砂を含む）
3．　〃　（2より暗い。ローム粒子、砂を少量含む）
4．黒褐色土
5．明褐色土（ローム粒子を含む）
6．暗褐色土
7．明褐色土（ローム粒子を含む。砂を少量含む）
8．黒褐色土（ローム粒子を含む。砂を少量含む）
9．黒灰色土（砂を少量含む）
10．暗褐色土（砂を少量含む）
11．　〃　（10より明るい。ローム粒子を含む。砂を少量含む）
12．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）

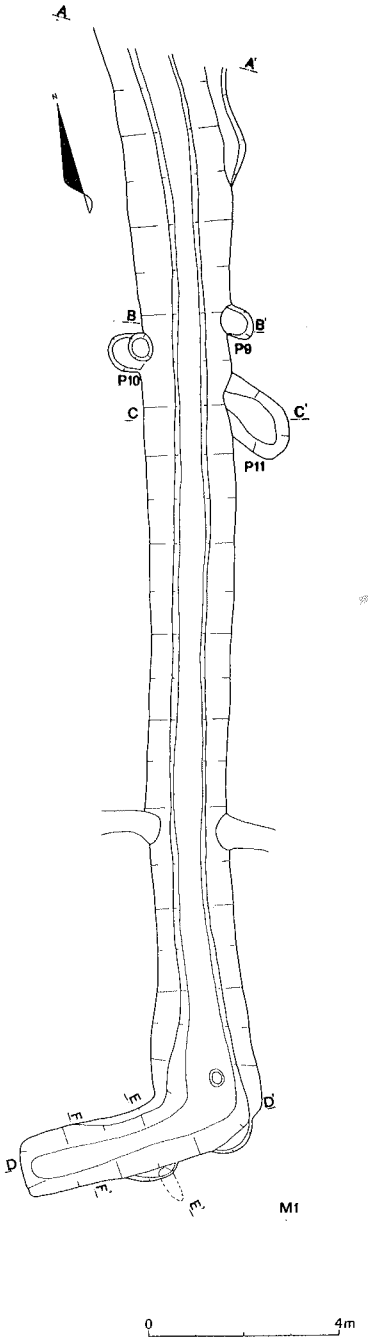


1．暗褐色土（ローム粒子・砂を含む）
2．　〃　（1より暗い）
3．　〃　（1より明るい。ローム粒子を少量含む）
4．暗灰褐色土（ローム粒子を少量含む）
5．明褐色土（ローム粒子を含む）
6．暗灰褐色土（4より暗い）
7．明褐色土（ローム粒子を多量に含む）
8．黄褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
9．黒灰褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
10．暗褐色土（ローム粒子を少量、砂を含む）
11．明褐色土（ローム粒子を含む）
12．黒灰褐色土（ローム粒子・ブロックを少量を含む）
13．明褐色土（1より暗い。暗褐色土を含む）
14．ロームブロック
15．明褐色土（1より明るい。ローム粒子を含む）
16．黄褐色土（ローム粒子を多量に含む）

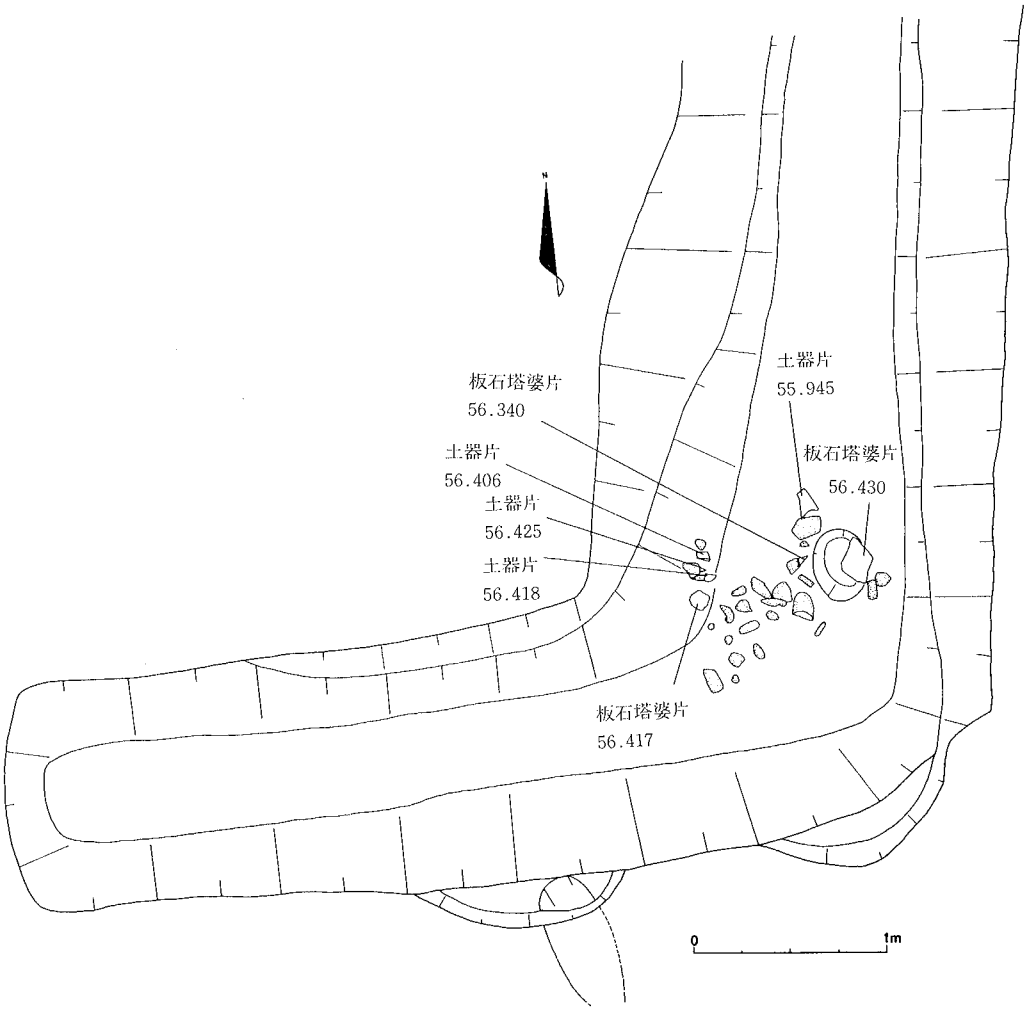


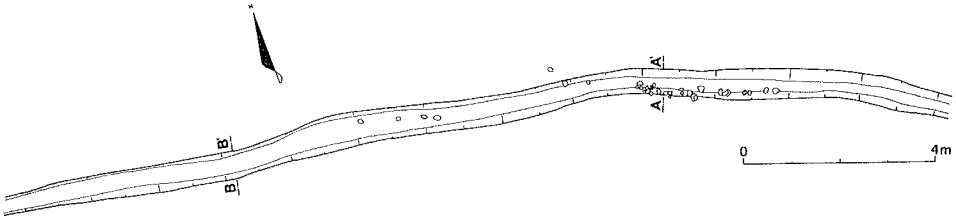
1．暗褐色土
2．　〃　（1より暗い）
3．黒褐色土（ローム粒子・ブロックを少量含む）
4．黒色土
5．黒褐色土（ローム粒子・ブロックを含む）
6．暗褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）
7．　〃　（2と同じ）
8．黒褐色土（ローム粒子を含む）
9．明褐色土（ローム粒子を多く含む）
10．黒褐色土（8より暗い。ローム粒子・ブロックを少量含む）
11．明褐色土（9より暗い。ローム粒子を多く含む）
12．暗褐色土（ローム粒子を多く含む）
13．黒褐色土（ローム粒子・ブロックを多量に含む）

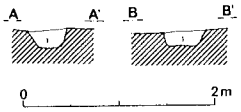




第７図　第９～11号土坑・第１号溝状遺構実測図（1／80・1／160 ）







1．暗褐色土（ローム粒子、ブロックを含む）

第８図　第１号溝状遺構遺物出土状態（1／40）・第２号溝状遺構実測図（1／80・1／160）

瓦質土鍋の破片、板石塔婆片、砥石片などが出土した。

なお、この溝状遺構は、昭和56年度に調査された鼠裏遺跡Ｃ区の溝状遺構の続きとみられる。

○第２号溝状遺構（第８図）

調査区の中央を、東西に横断している細い溝状遺構である。上幅0.4～0.8ｍ、下幅0.2～0.5ｍ、深さは20～30cmである。第１号溝状遺構と埋没谷の堆積土を切って構築されていた。覆土上層に、天明３年（1783）の浅間山噴火の際に堆積したと思われる粒子の粗い砂がみられ、覆土中位に礫が集中している部分があった。埋没谷へ向って低くなっており、排水路と考えられる。

○埋没谷（第３図）

調査区の西南部は、かなり広い範囲で薄く泥炭質の黒色土と灰色粘土が堆積し、西南方向へ緩く傾斜していた。埋没谷の縁辺部分と考えられ、昭和56年度に調査された鼠裏遺跡Ｂ区で発見された川跡の続きであろう。埋没谷内にも土坑が数基あり、小ピットが集中している部分があった。桝状のトレンチを４ケ所設定して調査を行ったが、第３トレンチより埴輪片、土師器片が出土した。

２．出土遺物

○第20号土坑出土遺物（第９図１）

１．瓦質の土鍋の破片である。内耳がつくものであろう。推定口径32cm。ロクロ調整。口唇部上面は若干凹面になってり、わずかに内傾している。外面に炭化物付着。胎土砂を含み、焼成良、灰褐色を呈する。

○第１号溝状遺構出土遺物（第９図２～６）

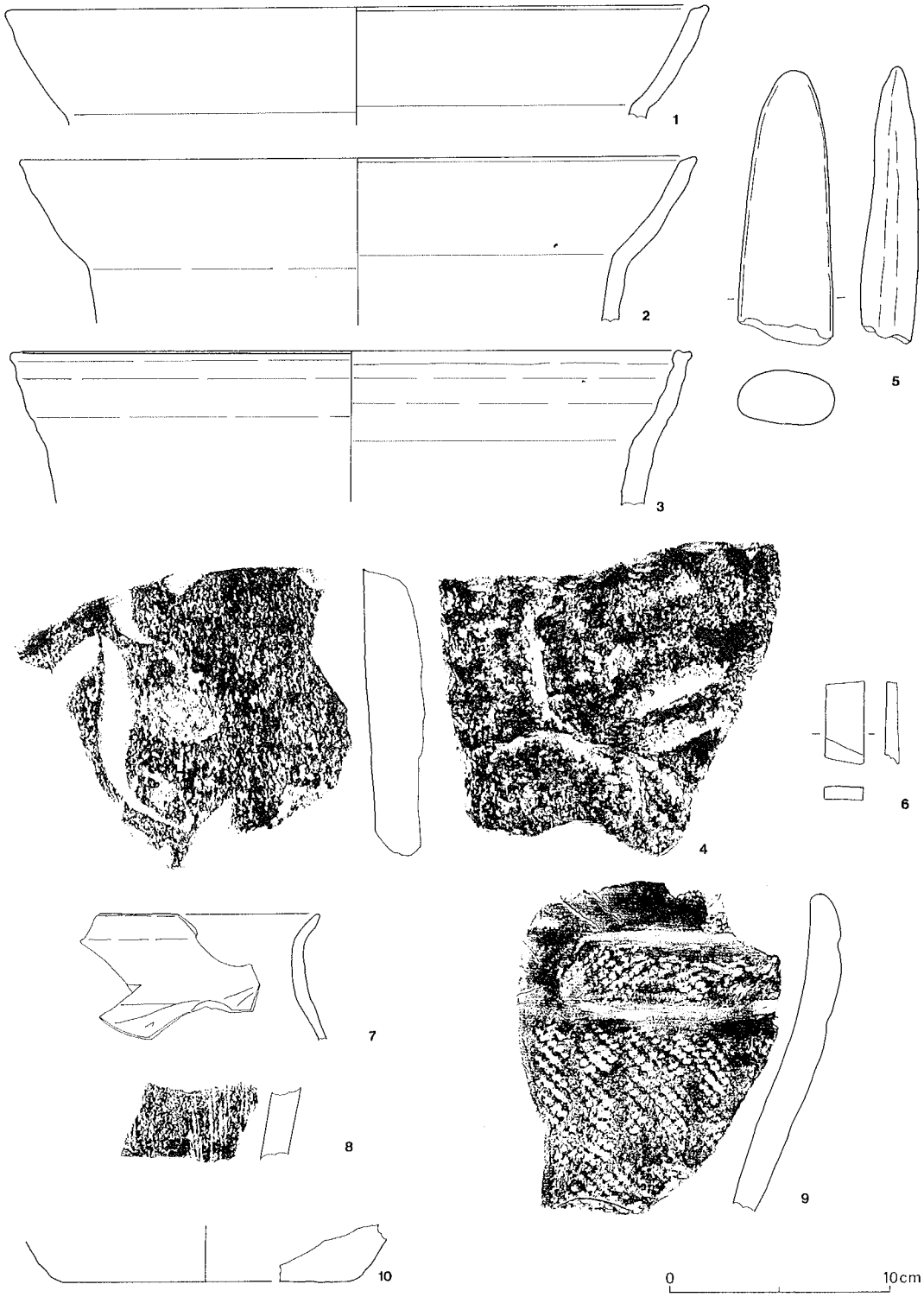
２．瓦質の土鍋の破片である。内耳がつくものであろう。推定口径31cm。ロクロ調整。口唇部上面は平坦で内傾する。内面はよくナデられており、頸部の屈曲は明瞭。体部外面にわずかに指の押圧痕がみられる。外面に炭化物付着。胎土砂を含み、焼成良、灰褐色を呈する。

３．瓦質の土鍋の破片である。内耳がつくものであろう。推定口径31cm。ロクロ調整。口唇部は器肉が内側へ少しせり出し、上面は平坦で中央に浅く溝が走る。内面は水挽き痕が明瞭。体部外面にはわずかに指の押圧痕が認められる。外面に炭化物付着。胎土砂・小石を含み、焼成良、灰褐色を呈する。

４．板石塔婆の破片である。正面に薬研彫によるキリークと蓮座の一部が認められる。裏面はほとんど剝離しているが、一部にノミ痕が認められる。石質は緑泥片岩。

５．磨製石斧と思われる。流入したものであろう。刃部欠損。残存部分の長さは12.6cm、幅最大値4.4cm、厚さ最大値2.5cm。基部はしだいに薄くなり、尖っており、表面はよく磨かれている。断面は長円形を呈する。石質は緑泥片岩。

６．砥石である。両端部及び背面を欠損している。残存部分の長さ3.3cm、幅1.8cm。図の上面がよく使用されており、側面も平坦になっている。石質は凝灰岩。



第９図　出土遺物実測図（1／3）

○埋没谷第３トレンチ出土遺物（第９図７・８）

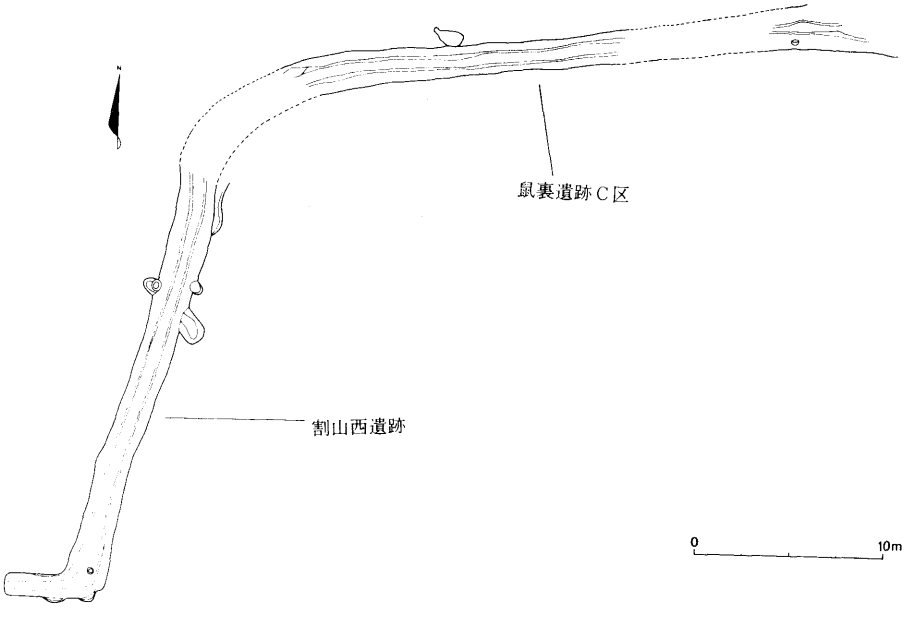
７．土師器甕の口縁部片である。口唇部は外反し、先端は尖っている。胴部外面ヘラ削り、内面はよくナデられている。胴部はかなり薄くなるものであろう。胎土砂を含み、焼成良、淡橙褐色を呈する。

８．埴輪片である。外面のハケ目は１cmあたり５～６本。内面はナデられている。胎土砂を多く含み、焼成不良、淡橙褐色を呈する。

○グリッド出土遺物（第９図９・10）

９．縄文土器片である。口縁部には、浅い沈線により横位の区画文が施されている。拓影図の向かって左側の割れ口に沿って垂下する沈線が認められる。縄文はＬＲＬ複節で、口縁部区画文内部は横転及び縦転。体部外面は縦転。内面は極めて丁寧にナデられている。胎土砂を含み、焼成良好、淡橙褐色を呈する。

10．土師質土器の底部破片である。鉢形を呈するものであろう。推定底径13cm。内面はほとんど剥離している。底面とその周辺の調整は粗い。胎土砂を少量含み、焼成良、淡橙褐色を呈する。



第10図　溝状遺構関係図　(1)（1／400）

V．まとめ

今回の調査で発見された第１号溝状遺構は、昭和56年度に調査を実施した、鼠裏遺跡Ｃ区の第２号溝状遺構（註１）の続きである。その位置関係は、第10図のようになり、西北隅が約110°の角度をもって屈曲している。

割山西遺跡の東にある割山遺跡では、昭和53年度（第２次）、昭和55年度（第３次）、昭和59年度（第４次）の調査（註２）により、遺跡の西部に、上記の溝状遺構と類似した形態の溝状遺構が発見されており、平面プランは、やや歪曲した形態ながら、長方形状を呈している。その東北隅の屈曲角度は約110°、東南隅は約70°である。第２次発掘調査報告書（昭和56年３月刊行）の中で、この溝状遺構が館の堀跡の可能性があることが既に指摘されており、14世紀頃に構築されて16世紀頃まで開口していたものと推定された。その後の調査結果もその見解と矛盾するものではなく、むしろ補強する経過を辿った観がある。

鼠裏遺跡Ｃ区の、第２号溝状遺構とやや規模の小さい第３号溝状遺構も、割山遺跡の溝造遺構と関連があるものと推定された。続いて今回の発掘調査で発見された第１号溝状遺構も、内容的に整合性はあっても矛盾するものではない。南端部の跡切れた状況は、土橋であった可能性もあろう。

割山遺跡の溝状遺構の東側には南北方向の埋没谷があり、鼠裏遺跡Ｃ区及び割山西遺跡の溝状遺跡の西側にも南北方向の埋没谷がある。すなわち、南北方向の埋没谷に挟まれた東西約150ｍの範囲に、規模・形態の類似した、方向性もしくは平面的計画性をもった溝状遺構が集中して発見されたことになる。なお、この地点は台地の末端部に近く、北へ600ｍも行くと急崖をもって低地に至る。

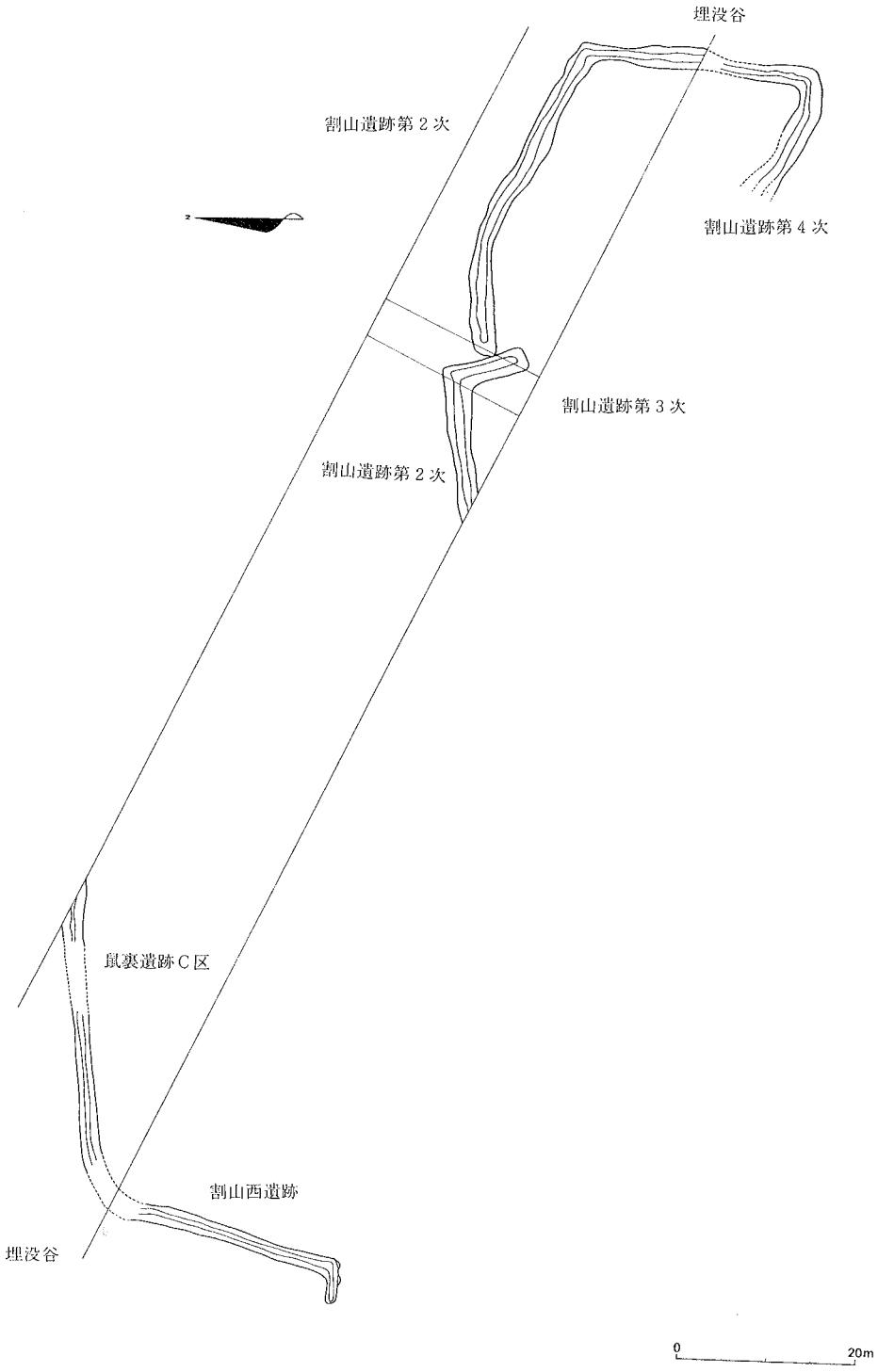
この東西約150ｍの範囲内に、建物跡等は発見されていないが、14世紀頃に構築された館があった可能性はますます高まったと言えよう。地形的にも館を構築するには適地であったと考えられる鼠裏遺跡Ｃ区の土坑から、乾元２年（1303）銘の板石塔婆や、13世紀末頃と推定される常滑片が出土していたことも注目されよう。ちなみに、この付近に館があったという伝承等は全く残されていない。

さて、割山西遺跡の一帯は、14世紀前半頃までは、武蔵七党のうちの猪俣党の一支族とされる人見氏の勢力範囲であったものと思われる。人見氏の館跡推定地は、割山遺跡の南南西約1.5kmにあり、県指定史跡になっている（註３）。割山西遺跡一帯が館跡であるとすれば、人見氏との関係が考慮されねばならない。また、14世紀後半には、割山西遺跡の東北東約2.5kmに、山内上杉氏の一族で深谷上杉氏の祖である上杉憲英が、庁鼻和城を築いたとされている。1333年の鎌倉幕府滅亡の余波なども考え合わせると、割山西遺跡に館が築かれたとされる14世紀頃には、この地域一帯はかなりダイナミックな歴史的展開があったものと予想されるが、現在のところ、これ以上の推論は資料不足の誘りを免れまい。

註１・註２　Ｐ５註１・註２参照　　註３　Ｐ５註３参照

付　　記

従来、割山遺跡、鼠裏遺跡として調査された範囲は、それぞれ調査区の中央にある南北方向の埋没谷によりその東西で遺跡の内容が異なるようである。館跡の可能性が指摘される範囲は、それぞれの埋没谷に挟まれた、割山遺跡の西部から、鼠裏遺跡の東部にわたる範囲である。この範囲は、今後は館跡推定地である割山西遺跡として把握すべきであろう。すなわち、東から西へ、埴輪窯跡を主体とした割山遺跡、埋没谷、割山西遺跡、埋没谷、近世の遺構を主体とした鼠裏遺跡が並んでいるものと考えたい（第11図参照）。



第11図　溝状遺構関連図　(2)（1／800）

写　真　図　版

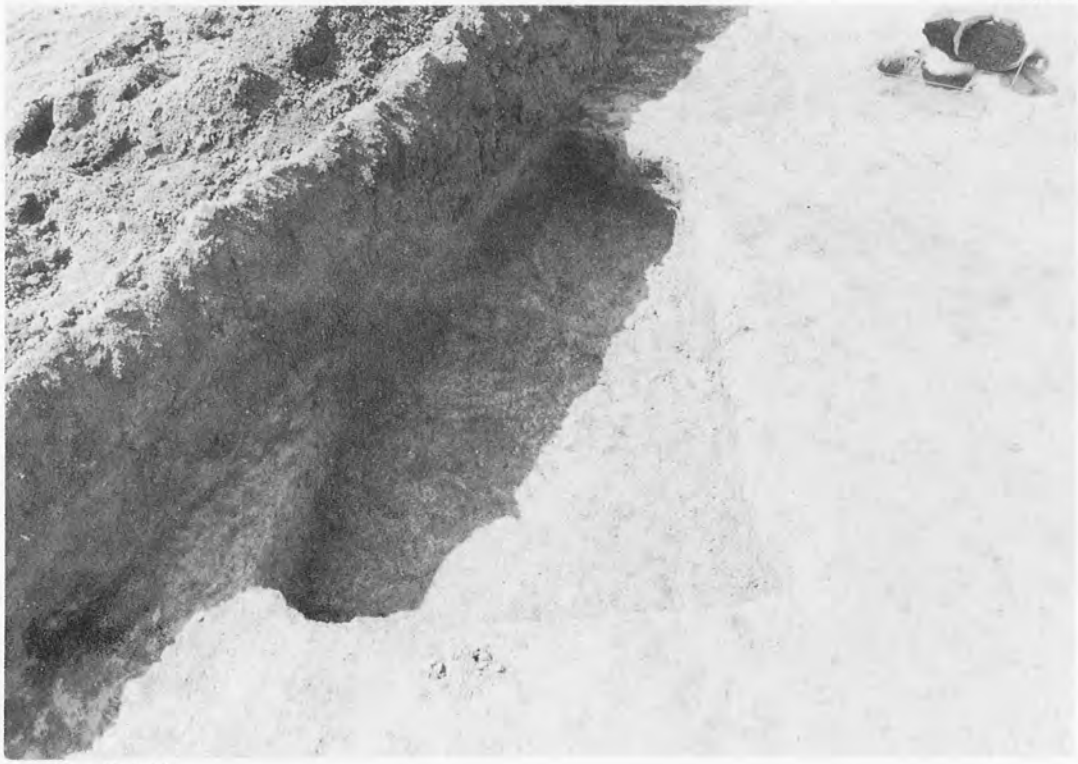
1．調査区全景（東から）

2．調査区全景（南から）

図版 2

3．調査風景

4．第８号土坑



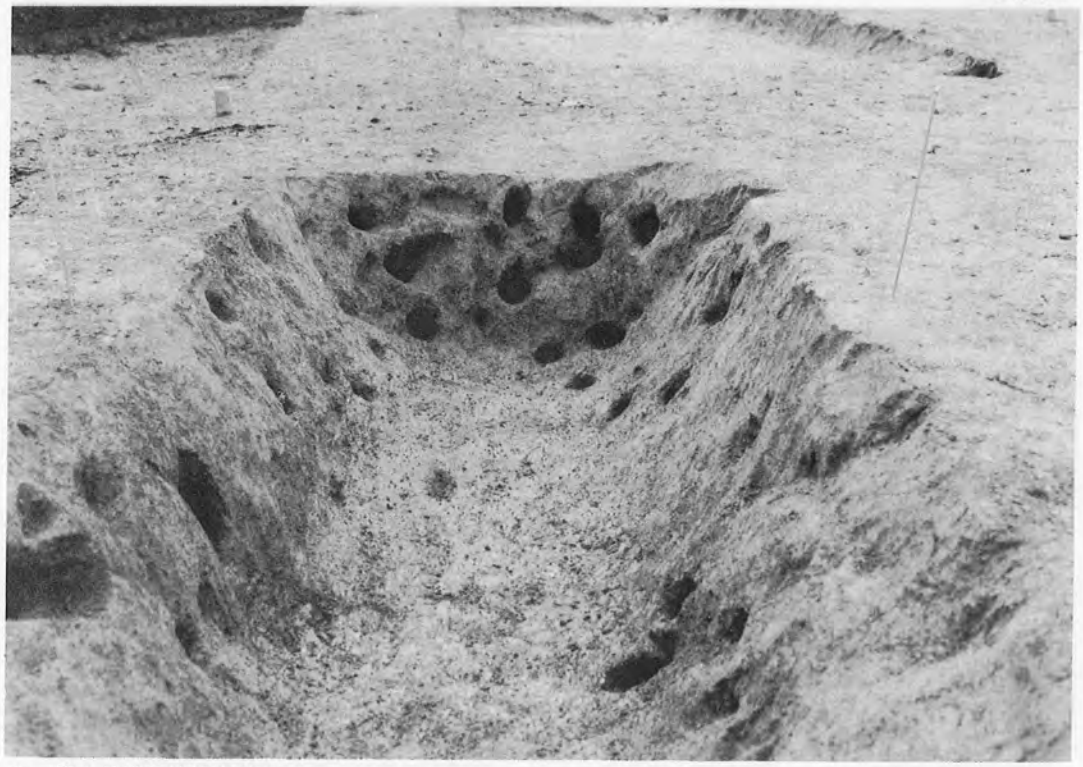
5．第14号土坑

6．第１号溝状遺構土層断面

図版 4

7．第１号溝状遺構（北から）

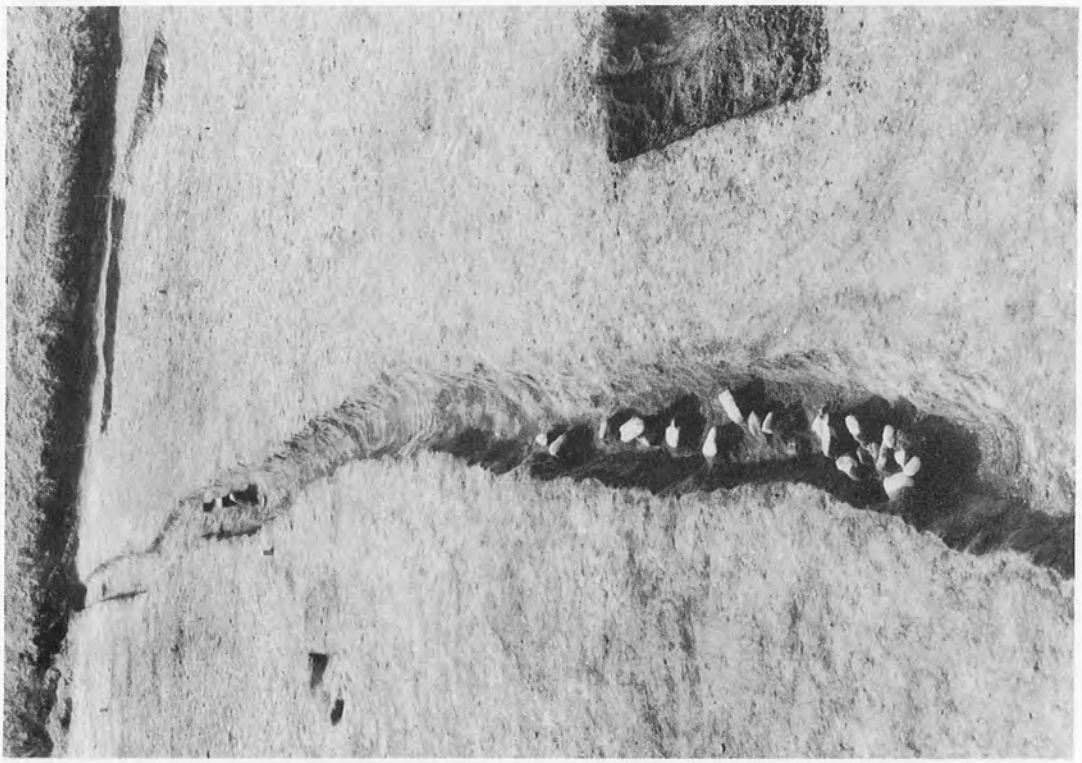
8．第１号溝状遺構（南から）



9．第１号溝状遺構南端部

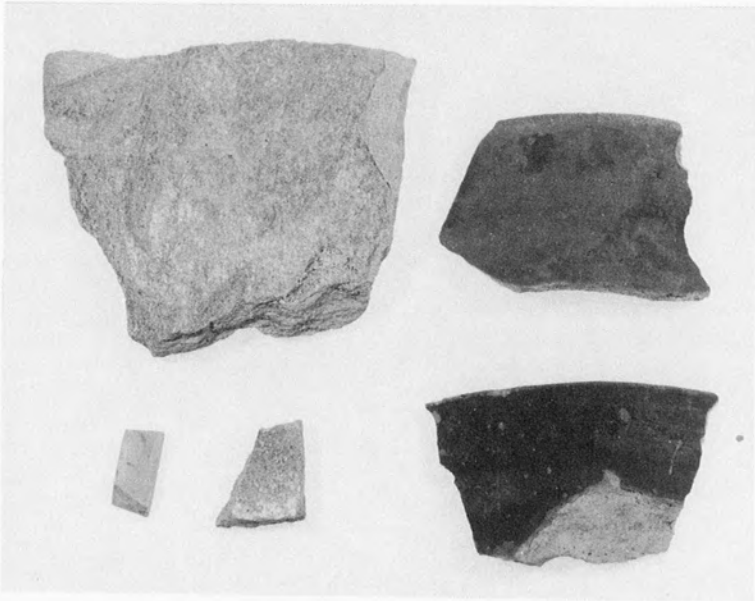
10．第１号溝状遺構遺物出土状態

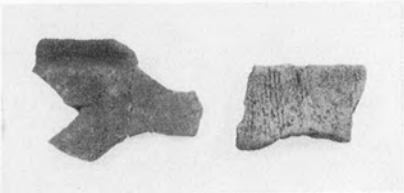
図版 6



11. 第 2 号溝状遺構

12. 埋没谷





13．出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集

割　山　西　遺　跡

印　刷　昭和62年２月10日
発　行　昭和62年３月２日

発行　深谷市教育委員会
印刷　大屋印刷株式会社

正　誤　表

ページ	行　数	誤	正
p５	28行目	註１　小泉泰之・大和修ほか	註１　今泉泰之・大和修ほか
	29行目	小泉泰之ほか	今泉泰之ほか
p９	6行目	○第２号土壙（第　図）	○第２号土壙（第５図）